

ゆうだい21栽培のポイント

ゆうだい21の特徴 (コシヒカリとの比較)

- 出穂は2~3日、成熟は4~5日遅い。
- 稈長は5~10 cm、穂長は2~5 cmほど長い。
- 1穂粒数は多いが穂数はやや少なく、登熟歩合はやや低くなる傾向があり、収量性は同程度である。
- いもち病にやや強く、穂いもちへの移行が少ない。
- 高温条件下の栽培でも乳白米などの発生が少なく、外観品質が低下しにくい。
- 収穫適期幅が広く、刈遅れによる品質低下が少ない。
- 特有の粘りでコシヒカリを上回る良食味品種である。

栽培上のポイント

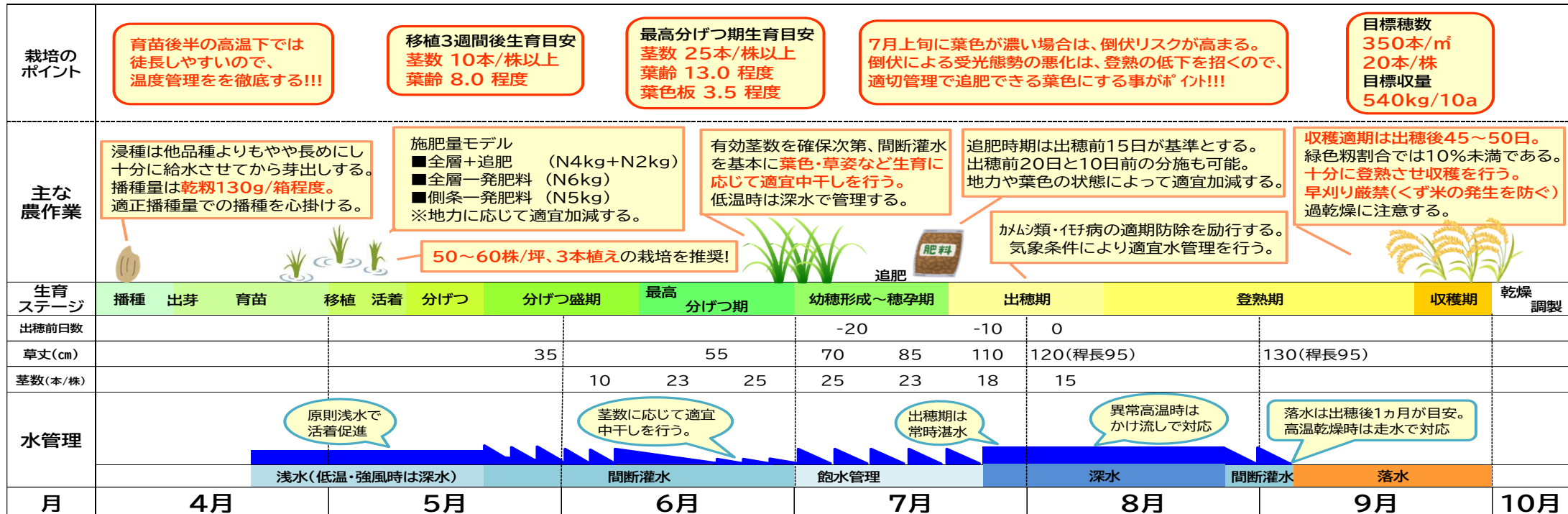
2021年 1月

- 1.【栽培適地】
栽培適地はコシヒカリ栽培地域とほぼ合致しており、播種、移植時期ともにコシヒカリに準じる形でよい。
- 2.【種子予措】
種子の休眠が深いため、**浸種期間を1~2日程度長めにすることで催芽時の揃いが改善される。**
- 3.【播種育苗】
乾籾130g/箱程度。育苗期間の高温に注意し、伸ばし過ぎないように管理を徹底する。
- 4.【移植】
栽植密度は**15~18株/m²(50~60株/坪)**。
1株当たり3本植えを基準とする。
- 5.【肥培管理】
基肥・追肥共に現地のコシヒカリ施用量に準じる。
窒素量モデル → 全層+追肥 (N4kg+N2kg)
全層一発肥料 (N6kg)
側条一発肥料 (N5kg)
■全層施肥量は基肥4kg/10a程度とする。
追肥は出穂15日前を目安に2kg/10a程度を施用する。(分施の場合、20日前と10日前にN1kgを2回施用。)
■一発肥料の場合は後半まで十分に肥効が持続するものが望ましい。(120日タイプ推奨)側条施肥では施肥量を8割程度に加減すること。

- ※地力や移植時期に応じて適宜加減をする。(特に肥沃な土地では肥培管理に十分に留意すること。)
※適切な施肥量・施肥時期によって倒伏させないことがゆうだい21多収の最大のポイントである。
ケイ酸質肥料は受光態勢を向上させ、収量を安定させるので積極的に施用すること。
- 6.【水管理】
分けつ期以降で有効茎数が確保され次第、葉色・草姿に応じて適宜中干しを実施する。目標25~30本/株
出穂期前後は湛水状態(深水)を心掛け、早期落水はしない。出穂後の異常高温時は走水を実施する。
 - 7.【病害虫防除】
コシヒカリ慣行栽培に準じてよい。いもちには比較的強いのでコシヒカリよりも防除の必要度は低い。
縞葉枯れ病が多発する地域では、適宜防除を実施する。
 - 8.【収穫】
緑色籾の割合で10%未満が刈り取り適期である。**刈遅れに伴う品質の低下がコシヒカリより小さいため、十分に登熟させることでくず米の発生を減らし、収量を確保することができる。**高温による急激急速な乾燥をせず、適正水分の確保に努める。

ゆうだい21の栽培ごよみ

基本技術の励行で安定多収・高品質栽培を目指そう!!



※上記の栽培ごよみは、ゆうだい21の育成地の栃木県真岡市における標準的な栽培様式である4月上旬播種(稚苗育苗)、5月上旬移植を基本にして、作成しております。気象・土壌などの栽培環境や作期が異なる地域では、それぞれの地域の条件にあった栽培を目指してください。栽培技術に関するお問い合わせは、下記問い合わせ先【宇都宮大学附属農場】までご連絡ください。

問い合わせ先: 宇都宮大学農学部附属農場 〒321-4415 栃木県真岡市下籠谷443 Tel:0285-84-2424 mail:fuznoujy@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp